

石狩海浜地域一帯の野鳥

樋口 孝城

要旨

石狩川河口から石狩湾新港までの海浜地域一帯の野鳥リスト(25科94種)を示すとともに、地域内における環境ごと(砂浜域、港内域、沖合域、草原域、上空域)の鳥類の生息・飛来状況を概説した。当該地域は、夏鳥の繁殖地、冬鳥の越冬地、旅鳥の渡り中継地として利用されている。鳥類相からみて特殊性は含まれず、普通の鳥たちの普通の生息・飛来を支えている地域であるが、環境保護などを通してのその普通性の持続が将来的課題として重要であろう。

1 はじめに

鳥類は生態系の重要な構成員である。ある地域範囲の鳥類の動向を把握することで、その地域全体の自然環境の現状と変遷の一部を垣間見ることができる。また、渡り鳥の動向によっては、彼らの繁殖地、越冬地、渡り中継地などの状況も推測可能となる場合もある。

ある地域の野鳥社会の全様を知るためには、飛来・生息する種の構成、各々の種の普遍性または稀少性、個体数の多寡、季節性などについての記録を必要とする。また、得られた記録についても、単年だけのものでは偶然性に大きく影響される可能性があるため、経年調査の積み重ねが要求される。

野鳥の移動性、観察時の気象条件の影響などによっては、調査者・観察者の目から見た野鳥社会状況が一日にして変化してしまうことは決して稀ではない。一人の人間が短期間だけ、しかも趣味的に観察した結果は、必ずしもその地域の野鳥社会の実際を反映しているわけではない。観察回数が少なければ、その中で起こった特異的事象が実際よりは強調されてしまう危険性もある。

今回の報告は石狩海浜地区一帯の野鳥について、筆者自身、筆者が主催する石狩鳥類研究会の会員、筆者が会員となっている北海道野鳥愛護会の会員諸氏、石狩海浜植物保護センター関係者などによるここ数十年の観察結果をまとめたものである。これらの観察は、一部を除いて特に具体的

目標を掲げた計画的調査ということではないので、全体として得られた結果は、当該地域のいくつかの環境下における確認鳥種、各鳥種の定性的飛来・生息状況、季節性などの断片的記録の集積に留まっている。しかしながら、それらの蓄積記録および過去の資料等を整理・分析することにより、石狩海浜地域一帯の鳥類相の概要はほぼ把握されるだろうと考えている。今回の報告が将来の石狩海浜地域の自然保護に役立てば幸いである。

2 野鳥生息環境

石狩海浜地域は石狩湾に面している地域一帯の総称であるが、ここでは観察記録の多くが集積している石狩川河口部から石狩湾新港の樽川埠頭周辺までの野鳥の生息・飛来状況を報告する。当該地域は野鳥生息環境の面からは、おおまかに次の4つに分けられる(図1)。

- ①砂浜域：石狩川河口から石狩湾新港東端までの砂浜
- ②港内域：石狩湾新港の防波堤や埠頭で囲まれた区域
- ③沖合域：沖合一帯
- ④草原域：はまなすの丘公園、および砂浜域の陸側後背部の原野・草原

また、これらの区域の上空を主たる生息空間そのもの、あるいは移動空間として頻りに利用する種もいるので、共通域としての上空域を加えるこ

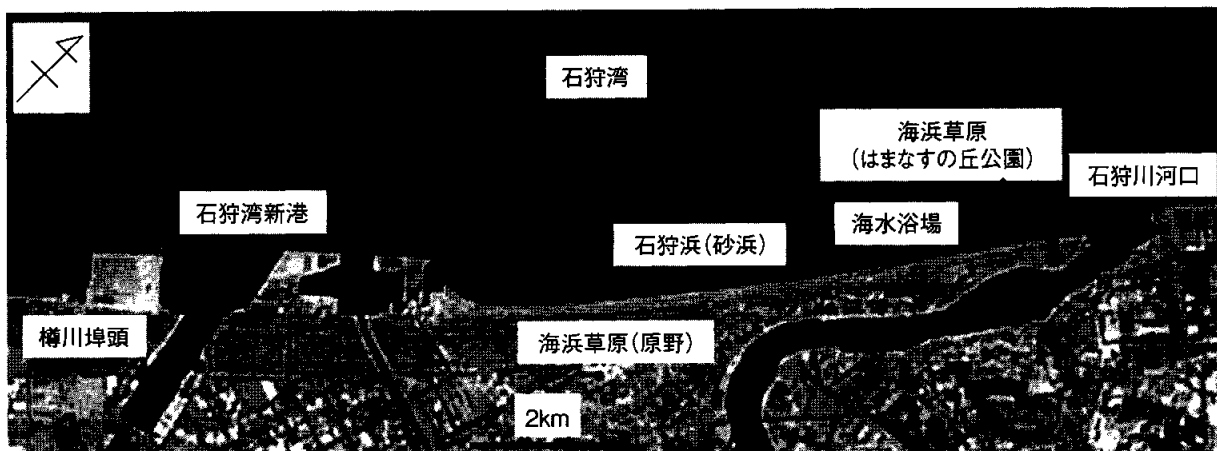


図1 石狩海浜地域一帯の地図

ととする。

3 野鳥リスト

表1には最近ほぼ15年間に観察された鳥種、それぞれの生息域、記録状況、季節性などが示されている。記載されているのは25科94種である。種の配列は日本鳥類目録改訂第6版（日本鳥類目録編集委員会、2000）に従っている。実際にはもっと多くの鳥種の記録があるが、これまでの目撃記録が1回だけ、あるいはそれに近く、また、生息分布域や渡りコースが石狩海浜地域一帯を大きくはずれている鳥種については記載していない。それらは何らかの原因による偶発的飛来種（迷行種）であり、石狩海浜地域一帯の野鳥社会の構成員からは除いた方が実際的である。一方、これは旅鳥に顕著なことであるが、記録的には稀であっても、渡りコースを考慮すると当該地域を通過すること

が決して偶発的ではないとみなされる種については記載してある。

各鳥種について、表1には環境ごとに毎年どの程度の定常性をもって記録されるか、ある意味での「記録され易さ」が示されている。これは年次記録を基とした各鳥種の記録頻度によっており、具体的なことは表に添えて記してある。なお、「記録され易さ」は1回ごとの観察にあてはまるものではないこと、個体数の多寡とは必ずしも一致しないことは確認しておかなければならない。たとえば、ハヤブサは個体数が少ないため、1回の観察では記録されないことの方がむしろ多いが、何回かの観察中には必ず記録され、当該地域における定住性が高い鳥として記載されることになる。

以下、それぞれの生息環境別に飛来・生息する野鳥を解説する。なお、ほぼ全域に生息し、科全体としてみれば最大優占となるカモメ類^(#1)については、まとめて別扱いとし、最後に取り上げる。

表1 石狩海浜地域一帯の野鳥リスト

科名	種名	生息環境					季節	環境省指定	北海道指定
		砂浜	港内	沖合	草原	上空			
アビ科	アビ		△	○			冬		
	オオハム		△	○			冬		
	ハシジロアビ		△	△			冬		
カイツブリ科	ハジロカイツブリ		◎	○			冬		
	ミミカイツブリ		◎	○			冬		
	アカエリカイツブリ		△				冬		
	カンムリカイツブリ		◎	△			冬		絶滅危急種
ウ科	ウミウ		◎	◎			留		
	ヒメウ		◎	◎			冬		
サギ科	ダイサギ	△					夏		
	アオサギ	◎					夏		

注1 「類」は分類学の用語ではなく、同一あるいは近似の「科」に属する鳥という意味の一般的な総称である。文中では以下同様に用いられている。

科名	種名	生息環境					季節	環境省指定	北海道指定
		砂浜	港内	沖合	草原	上空			
カモ科	マガモ		△	△			留		
	ヒドリガモ		△	△			旅		
	キンクロハジロ		◎				冬		
	スズガモ		◎	○			冬		
	クロガモ		◎	◎			冬		
	ピロードキンクロ		◎	◎			冬		
	シノリガモ		◎	○			冬		希少種
	コオリガモ		△				冬		
	ホオジロガモ		◎	◎			冬		
ウミアイサ		◎	○			冬			
タカ科	ミサゴ			○		◎	夏	準絶滅危惧	絶滅危急種
	トビ	◎	◎		◎	◎	留		
	オジロワシ	○	○			◎	冬	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危惧種
	オオワシ	○	○			◎	冬	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危惧種
	ケアシノスリ				△	△	冬		希少種
	ノスリ				◎	◎	夏		
	ハイイロチュウヒ				△	△	冬		希少種
ハヤブサ科	ハヤブサ	○	△			◎	留	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危急種
	コチョウゲンボウ				△	△	冬		
	チョウゲンボウ				△	△	冬		
ミヤコドリ科	ミヤコドリ	△					旅		
チドリ科	ハジロコチドリ	△					旅		
	コチドリ	○					夏		
	シロチドリ	◎					旅		
	メダイチドリ	◎					旅		
	ムナグロ	◎					旅		
	ダイゼン	◎					旅		
	シギ科	キョウジョシギ	◎					旅	
ヨーロッパトウネン		△					旅		
トウネン		◎					旅		
ヒメウズラシギ		△					旅		
ハマシギ		◎					旅		
サルハマシギ		○					旅		
コオバシギ		○					旅		
オバシギ		○					旅		
ミュビシギ		◎					旅		
ヘラシギ		△					旅	絶滅危惧ⅠB類	絶滅危急種
アオアシシギ		○					旅		
キアシシギ		◎					旅		
イソシギ		○					夏		
ソリハシシギ		◎					旅		
オグロシギ		○					旅		
オオソリハシシギ		◎					旅		
ダイシャクシギ		△					旅		
ホウロクシギ	◎					旅	絶滅危惧Ⅱ類	希少種	
チュウシャクシギ	◎			○		旅			
ヒレアシシギ科	アカエリヒレアシシギ	○					旅		
カモメ科	ユリカモメ	◎	○	◎			旅		
	セグロカモメ	◎	◎	◎			冬		
	オオセグロカモメ	◎	◎	◎			留		
	ワシカモメ		○				冬		
	シロカモメ	◎	◎	◎			冬		
	カモメ	◎	◎	◎			冬		
	ウミネコ	◎	◎	◎			夏		
	ミツユビカモメ	△		○			旅		

科名	種名	生息環境					季節	環境省指定	北海道指定
		砂浜	港内	沖合	草原	上空			
カモメ科	アジサシ	○		◎			旅		
	コアジサシ			△			旅		
ウミスズメ科	ウミガラス		△	○			冬	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危機種
	ハシブトウミガラス		△	△			冬		
	ケイマフリ		○	△			冬	絶滅危惧Ⅱ類	絶滅危急種
	マダラウミスズメ		△	△			冬	情報不足	希少種
	ウミスズメ		△	○			冬	絶滅危惧ⅠA類	絶滅危急種
フクロウ科	コミズク				△		冬		
ヒバリ科	ヒバリ				◎		夏		
ツバメ科	ショウドウツバメ				◎		夏		
	ツバメ				○		夏		
セキレイ科	ハクセキレイ	○			◎		夏		
モズ科	モズ				◎		夏		
	アカモズ				△		夏	絶滅危惧ⅠB類	希少種
ツグミ科	ノゴマ				◎		夏		
	ノビタキ				◎		夏		
ウグイス科	コヨシキリ				◎		夏		
ホオジロ科	ホオアカ				◎		夏		
	アオジ				◎		夏		
	オオジュリン				◎		夏		
	ユキホオジロ				△		冬		
アトリ科	カワラヒワ				◎		夏		
ハタオリドリ科	ニューナイスズメ				○		夏		
	スズメ				○		留		
ムクドリ科	コムクドリ				◎		夏		
	ムクドリ				◎		留		
カラス科	ハシボソガラス	◎	◎		◎		留		
	ハシブトガラス	◎	◎		◎		留		

※1997年～2010年の14年間で、各生息域で記録が毎年ある種には◎、記録年数が5～13年の種には○、記録年数が4年以下の種には△を記す。5年以上と4年以下で区切ったことに特別な根拠はない。

※「上空」については、通過だけであればほぼすべての種が記載対象となるが、ここではタカ科とハヤブサ科の鳥だけを対象としている。

※留（留鳥）は通年生息、夏（夏鳥）は春夏期に渡来して繁殖、冬（冬鳥）は冬季に飛来して越冬、旅（旅鳥）は春と秋の渡り時期に通過する。

3.1 砂浜域

ほぼ7.5 kmの砂浜で、主役として飛来・生息するのはシギ・チドリ類（ミヤコドリ科、チドリ科、シギ科、ヒレアシシギ科の鳥）とカモメ類である。なお、サギ科のダイサギとアオサギも記録されているが、それらの主たる生息域は石狩川内水面および内陸部水面であること、また、砂浜での観察といっても、その大部分は石狩川河口の川側であることから、ここでは省略する。

記録のあるシギ・チドリ類は27種であり、このうち夏鳥であるコチドリとイソシギを除くすべてが春と秋の渡り時期に石狩浜を通過する旅鳥である。コチドリとイソシギは当該地域近隣で繁殖している可能性はあるが、砂浜に来ることは比較的稀である。なお、シギ・チドリ類の繁殖地と越冬地については野鳥図鑑類（たとえば、高野，1981）を参照されたい。

春と秋の渡りにおいてシギ・チドリ類が石狩浜を通過するおおよその時期は、春季は3月下旬から6月上旬まで、秋季は7月中旬から11月上旬までである（図2）。春の渡りは南方の越冬地から北方の繁殖地への成鳥の移動である。また、秋の渡りは北方の繁殖地から南方の越冬地であるが、前半（7月中旬～8月下旬）は繁殖を終えた成鳥の渡りであり、後半（9月上旬～10月下旬）はその年に生まれた幼鳥の渡りである。なお、これらの時期は大体のものであり、特に秋の成鳥の渡りが9月、10月にまで及ぶこと、種によっては、幼鳥の渡り



図2 シギ・チドリ類が石狩浜を通過する時期

が11月上旬まで続くことも稀ではない。

石狩浜はシギ・チドリたちの渡りの中継地として利用される。かなり稀ではあるが、標識調査のための足輪が装着された個体、また、たとえばヘラシギ(写真1)のように極めて個体数が少なく、単独行と推察される種が、2、3日間は連続して目撃されることがしばしばあることから、短日間は滞在して、休息、および次の中継地までの移動に必要なエネルギー補充のための採餌を行う個体や群れも多いものと考えられる。ただし、移動ルートについてはほとんど解明されていないのが実情である。移動ルートは種によって違うかもしれないが、また、同じ種でも春の渡りと秋の渡りとでは違う可能性もある。さらには同じ種でも個体(個体群)ごとに違う可能性まで考えなければならない。利用度はともかく、様々な移動ルート中の一地点として石狩浜があることには間違いない。

最も一般的に見られ、個体数も多いのはシギ科のトウネンである。日によっては数十羽の群れがいくつか波打ち際で採餌をしたり、少し陸側の砂地で休息をとったりしているのが見られる。トウネンの他には、シロチドリ、メダイチドリ、ハマシギ、ミユビシギ、キアシシギ、ソリハシギといったあたりが比較的良好に見られる。アオアシシギ、オグロシギ、ツルシギは石狩川沿い内陸部の水場では一般的であるが、砂浜には少なく、特にツルシギはこれまでのところ記録が得られていない。ただし、記録が得られていないことと、飛来・生息しないこととは決して同義ではないことをこわっておく。



写真1 ヘラシギ 石狩浜 2010年8月28日 蓮井肇氏(北海道野鳥愛護会)撮影。全世界で約2,000羽しかいないとされているが、2010年には石狩浜で少なくとも6例の観察があった。

いわゆるシャクシギのうち、ホウロクシギとチュウシャクシギは少数ながらも毎年目撃される。本州方面では比較的良好に見られるダイシャクシギは、石狩浜に限らず北海道全体でも極めて稀である。ハジロコチドリ、ヨーロッパトウネン、ヒメウズラシギ、ヘラシギも極めて記録が少ないが、これは石狩浜に限ったことではなく、北海道全体、日本全体をみても観察例は極めて少ない。ミヤコドリも少ないが、石狩湾新港から新川河口(石狩湾新港から南西へ約6km)にかけての砂浜を含めると、特にここ数年は毎年目撃されており、ヘラシギなどの少なさとはだいぶ程度が違うようである。

近年、石狩浜はかつてに比べて海岸線がかなり後退し、砂浜部分が随分と狭くなってきている。特に、はまなすの丘公園付近では、波の高さ次第によっては、砂浜部分がほとんどなくなることもある。しかしながら、それと連動してシギ・チドリ類の飛来が大きく減少してきているという感じは受けない。ただ、これはあくまでここ数十年についてのことである。それよりも前の状況については、印刷物として残された観察記録が皆無に近いため、現在との比較は困難である。後述するように、石狩湾新港建設によって石狩浜が寸断されたのが40年ほど前のことであるが、その頃のことは全くわからないのが実情である。

もともと石狩浜は潮位差が小さい日本海側に位置しているため、干潟はほとんど出ない。推論ではあるが、海岸線付近の砂中や植物性漂着物の小動物を餌とするならば、砂浜が広いことよりも、海岸線付近がゆるやかな傾斜になっていることの方が採餌環境としては重要と考えられる。実際、特に石狩川河口近くで近年顕著になってきていることであるが、海岸線の砂が波でえぐられて崖のような形になってしまったところでは、シギ・チドリ類はほとんど見られない。

今のところ、海岸線付近のなだらかさは一部を除いて維持されてきているので、シギ・チドリ類の生息・飛来には特別な影響を与えていないようである。しかしながら、それがいつまで維持されるかは保証の限りではない。海岸線の崖化を招かない対策が今から必要であろう。

3.2 港内域

石狩湾新港は1973年から建設が開始され、その後いくつかの埠頭建設などが続けられて現在の形に至っている(図1)。新港によって砂浜は石狩川河口側(石狩市)と新川河口側(小樽市)に分断された。このことは前項のシギ・チドリ類には何

らかの負の影響を与えた可能性はあるが、一方では港湾内という新しい環境を提供し、海鳥の飛来を招く結果となった。

新港内で見られるものは、ウ科、カイツブリ科、カモ科、カモメ科の鳥であり、稀にアビ科とウミスズメ科の鳥が入り込む。季節的にはほとんどが冬季(11月～翌年3月)である。留鳥のオオセグロカモメ、同じく留鳥のウミウ(ただし、夏季にはその多くが浜益方面に移動)、夏鳥のウミネコを除いては、すべて冬鳥として飛来する。港内およびその周辺で越冬するものも多いとみられるが、カイツブリ科とカモ科の鳥の中には厳冬期にはさらに南下するものも少なくないと推測される。

カイツブリ類は時として小群となる春の移動期を除き、通常は単独あるいは2、3羽の群れが港内のあちこちで見られる。ハジロカイツブリが最も普通で、次いでカンムリカイツブリである。ミミカイツブリは少数、アカエリカイツブリはめったに見られない。

カモ類では冬季初めにスズガモがやや多く見られ、厳冬期にはシノリガモ、ホオジロガモ、ウミアイサが中心となる。シノリガモは個体数的にはそれほど多くはないが、数羽単位の小群がいくつかに常に見られる。クロガモとビロードキンクロは後述するように沖合にいる方が多く、港内にはあまり入らない。コオリガモは極めて稀である。参考までに、同じく石狩湾にある小樽港でもコオリガモは稀である。とはいえ、それは近年のことであり、10年ほど前までは普通に近く記録されていたようである(北海道野鳥愛護会, 2001)。道北方面では近年も安定して観察されているようであり、コオリガモ自体が減少したのではなく、石狩まで南下する個体が減少したのかもしれない。

なお、マガモとヒドリガモの記録もあるが、これらは春と秋の移動時期に短時間だけ港内水面で羽を休めたという程度であり、本質的に港内を生息・飛来域の一つとしているわけではないと考えられる。ただし、石狩湾に面する小樽方面の港や厚田港(石狩市厚田区)ではマガモやコガモのような淡水性のカモが、ある期間定住したこともあり、石狩湾新港においても、同様の事態が起こる可能性を排除することはできない。

アビ科とウミスズメ科の鳥は非繁殖期である冬季には主に海洋上で過ごすので、港内に入るのは稀である。ここ十年間ぐらいの目撃例は両科合わせて20例程度である。多い年でも5例ぐらい、全く目撃例がない年もある。

港内は毎年のように行われている何か所かでの工事、大型船の出入り、週末に目立つ多数の釣り

人などによる攪乱があるため、鳥たちがよく集まる(群れる)場所が年によって変わることが多い。工事などによって、水深や餌動物(小型魚類や底生貝類など)の生息分布が変わるためかもしれない。しかしながら、全体として見た場合、ここ数十年、港内の鳥は種類のにも数的にもそれほど大きな変化はなく推移している。人為的攪乱が将来どのような方向に進むかは明確ではないが、大きな工事などが一段落すれば、鳥たちから見て安定した環境になり、小樽港と同じように定常的な港内鳥社会が形成されていくものと予想される。

この項の最後にカンムリカイツブリについて触れておく。カンムリカイツブリは以前はかなり稀で、特に厳冬期にはほとんどいなくなっていた。しかしながら最近では増加傾向にあり、厳冬期でも見られるようになってきている。このことが近年盛んに言われている地球温暖化、海水温上昇との程度関連するかは明らかではない。ただ、一つの指標として、カンムリカイツブリの越冬状況を将来にわたって見ていくことは意味あることかもしれない。

3.3 沖合域

沖合い域とは、沖合一帯のうち海岸線の小高い場所から望遠鏡を用いて見える範囲である。明るく晴れていて、波もなければ、かなり遠くまで(500mを少し越す程度か?) 見ることができる。

種類のおよび季節的には前項の港内域の鳥と同じであるが、アビ類とウミスズメ類が見られる可能性が港内よりやや高い。クロガモの数十羽単位の群れのいくつかはほぼ定常的に見られる。また、クロガモの群れに混じって、あるいは近接して少数のビロードキンクロがしばしば見られる。

望遠鏡での可視距離以遠については不明である。しかしながら、石狩湾新港東埠頭の漁港に戻ってきた漁船の網に絡まっていたハシブトウミガラスの目撃事例、種はわからないが鳥が網にかかることがよくあるという漁船員の話などから、ウミスズメ科の鳥などが、ある程度は沖合に生息しているようである。

なお、沖合の鳥については以下の事件が参考になるだろう。

2004年11月13日、韓国籍の貨物船マリーンオーサカ号(5,500トン)が暴風のため流されて石狩湾新港の北防波堤に衝突、破壊、沈没し、重油約200トンが流出した。流出油の一部は沖合を流れ、石狩市浜益区(当時は浜益村)沖まで達した。この油汚染のため死亡に至った海鳥は浜益海岸などで35羽が確認され、マダラウミスズメ、ウミス

ズメ、エトロフウミスズメ、ウトウが含まれていた(武田, 2005)。このことから、浜益沖合にとどまらず、当該地域沖合にも11月半ば近くには、これまで確認されていないエトロフウミスズメやウトウも含めたウミスズメ類がかなり飛来・生息しているものと推察される。

3.4 草原域

主たる草原域は、海浜植物保護地域としてのはまなすの丘公園とその周辺、および海水浴場付近から石狩湾新港方面に続く石狩砂丘地域である。生息・飛来する鳥のほとんどがスズメ目(表1のヒバリ科以降)に属するもので、春夏季に現地内で繁殖する夏鳥が多くを占める。他にはその鳥たちを獲物とする猛禽類がいるが、それについては次の上空域の鳥で述べる。

はまなすの丘公園は背丈の低い海浜植物からなる草原で、最も多いのはヒバリであり、ついでノビタキ、ホオアカ、オオジュリン、コヨシキリとなる。石狩灯台やヴィジターセンター周辺にはやや背丈のある木本・灌木もあり、モズ、ノゴマ、カワラヒワ、ムクドリなどが加わる。公園の海側近くをショウドウツバメが飛ぶのがよく目撃されるが、近辺での繁殖は行われていないようである。時折ツバメ(種としてのツバメ)が飛ぶことがあるが、それほど離れてはいない厚田区聚富(しっぶ)の酪農家牛舎での繁殖個体群のものかもしれない。

ヴィジターセンターより市街地寄りの草原では、近年、全国的にその減少が危惧されている種の一つであるアカモズも目撃されている。これまでのところ稀という程度であり、繁殖は未確認である。近隣では、石狩川河口の対岸にある北石狩衛生センター付近で少数が繁殖しているようであるが、その個体群との関連は明らかではない。

石狩砂丘地域は海側の砂丘と陸側の砂丘とからなり、両砂丘の境界あたりを海岸道路が通っている。そのため、草原は海側と陸側に分断されているように見える。

海側砂丘草原ははまなすの丘公園と類似の環境であり、ヒバリ、ノビタキ、ホオアカなどが生息するが、個体数は少ないように感じられる。車の乗り入れによる植生破壊の影響があるかもしれない。車の乗り入れ規制強化による植生回復が期待される場所である。

陸側砂丘草原は、はまなすの丘公園や海側砂丘草原に比べて低木類が多く、灌木原野草原のよう

な観がある。これまでのところは海岸道路から見える範囲での観察に留まっており、不十分な観察記録しか得られていないが、生息・飛来する野鳥は基本的にははまなすの丘公園および海側砂丘草原のものと変わりはない。ただ、さらに陸側には防風林として残された天然のカシワ林が広がっていることから、森林性の鳥が加わっている可能性がある。これについては別途調査の予定である。

冬季、12月半ばぐらいから翌年3月いっぱいぐらいまでは、はまなすの丘公園に行く道路も、砂丘草原を通る海岸道路も除雪が行われなないので、車での通行はできなくなる。徒歩あるいは歩くスキーなどでの観察も困難が伴うため、真冬の観察・調査はほとんど行われていない。以下は初冬の11月から12月にかけての状況である。

この時期の草原域は、夏鳥たちは既に渡去して殆どいなくなっており、次に述べる上空域の鳥以外にはムクドリの群れが飛ぶぐらいである。ただ、1例ではあるがコミミズクの記録、そして数例のユキホオジロの記録がある。コミミズクは海側砂丘草原の海水浴場近く、ユキホオジロははまなすの丘公園の石狩川河口近くなどで目撃されたものである。コミミズクが冬季に飛来する可能性は十分にあり、決して偶発的飛来ではないと考えられる。今後の目撃例が増えたならば、次に書く上空域の猛禽と同じような扱いをしてもいいだろう。

3.5 上空域

もとより鳥類のほとんどは移動などのために上空を飛ぶのが通常であるが、ここでは上空から餌を探したり、上空で持続的に帆翔^(注2)したりする、タカ科およびハヤブサ科の鳥、いわゆる猛禽類を主たる対象とする。

年間を通してもっとも普通なものはトビである。草原域、特にはまなすの丘公園の石狩川河口付近の上空に数多く見られる。

一年中見られるものとしてトビ以外にハヤブサがいるが、目撃機会は多くはない。そもそも絶対的個体数が少なく、また行動圏も広いため、観察記録的には稀である。しかしながら、毎年確実に、ほぼ同じような頻度で観察されてきている。秋には幼鳥も見られることから、近隣で(といっても、かなり広い範囲ではあろうが)繁殖が行われているものと推察される。

夏から秋にはミサゴとノスリが加わるが、魚類を獲るミサゴは海上に、ネズミ類などを獲るノスリは原野上にと、ほぼ限られて見られる。

注2 帆翔(はんしょう):翼を広げて気流などを利用して羽ばたかずに飛ぶこと。

他は冬鳥である。オジロワシとオオワシは冬中、ある程度の頻度で見られる。砂浜に降りていることもあるが、多くは海岸線に沿っての飛翔である。どこからどこへ、どんな目的で移動しているかは推察し難く、ともかく飛んでいるとしか言えない。ケアシノスリ、ハイイロチュウヒ、コチョウゲンボウ、チョウゲンボウは初冬に草原域上で稀に見られる程度である。草原が雪に覆われてしまうと、ネズミなどの地上性小動物の捕獲も困難になるだろうから、積雪期には雪の少ない地域に移動するのかもしれない。ただ、草原域のところでは述べたように、積雪期には観察・調査自体も困難となり、実態は把握されていない。

3.6 カモメ類

カモメという呼称はチドリ目カモメ科に属する鳥をまとめて表して用いられる場合が一般的であるが、そもそもカモメという種名の鳥も存在する。以後、カモメ科の鳥を総称する「カモメ類」と、その中の一種である「カモメ」を使い分ける。

当該地域でこれまで記録のあるカモメ類は、表1に見られる通り10種である。これまでの記録が少なくその飛来傾向を十分には把握できないワシカモメ、ミツユビカモメ、コアジサシを除く7種について、生息・飛来の季節性を簡単に表現してみたのが図3である。一応、ここ十数年の筆者自身による観察記録（どの年も毎月3～4回の観察を実施）を総合し、各月の上・中・下の3旬における、それぞれの種の記録率（観察実施回数に対する記録回数の割合）を基にしている。記録率がおおむね80%以上であれば「普通に見られる」、20～70%であれば「時々見られる」、20%未満であれば「稀に見られる」というものである。観察実施日の気象条件、観察時刻・時間なども全く統一性を欠いており、基本的には全く感覚的なもので

あるが、それぞれの種の飛来・生息状況については、定性的にはかなり明らかになっている。以下、個々の種について簡単に説明する。

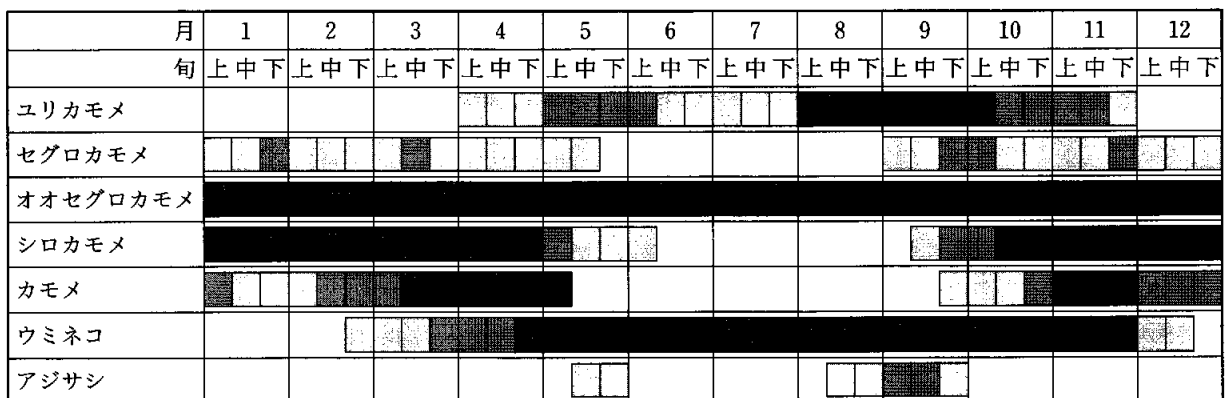
ユリカモメ：春季（主に5月）は北へ向かう成鳥夏羽群、秋季（主に8～9月）は南へ向かう成鳥冬羽と幼鳥の混群が通過する。また秋季には夏羽から冬羽へ換羽中の個体も混じる。6月中・下旬～7月にも稀に見られるが、冬季は見られない。渡り時期には同じ場所でほぼ毎日のように見られるが、同じ群れが長く滞在するのではなく、違う群れが次々に来るものと考えられる。

セグロカモメ：オオセグロカモメとの識別は背の灰～黒の濃淡によるが、光の加減によっては識別にまぎれも生じる。また中間的な羽色の個体もいるようであり、明らかにセグロカモメと断定できるものは必ずしも多くはない。識別困難な個体をすべてセグロカモメに含めても、オオセグロカモメに比べるとかなり少ないとみなされる。9月になったら渡来し始め、翌年5月前半までには渡去する。

オオセグロカモメ：カモメ類は一年中見られるが、その中で完全に周年見られる種はオオセグロカモメだけである。個体数も多い。

シロカモメ：早いものは9月半ばに渡来する。10月から翌年4月末まではオオセグロカモメと同じくらい、場所によってはそれを上回るぐらいの数がいる。

カモメ：9月下旬から翌年5月上旬までいるが、春秋の渡り時期、特に春には数百羽の大群となり、石狩湾新港内に浮かぶことがある。また、これまでの観察で特徴的なことは、5月中旬近くに一齐に移動し、急にいなくなってしまうように見えることである。ただし、これについて



■ 普通に見られる ■■■ 時々見られる □ 稀に見られる

図3 石狩海浜地域一帯におけるカモメ類の季節性

は更なる確認が必要である。

ウミネコ：3月に入るところから見られ始め、4月下旬ころから11月末ころまで極めて普通に見られる。夏季間の個体数はオオセグロカモメをわずかに上回る感じである。真冬の1月の記録はないが、少数が越冬しているという小樽方面の状況を考慮すると、石狩でも越冬個体がいる可能性がある。

アジサシ：5月および8～9月の春秋の渡り時期に数十羽程度の群れがしばしば観察される。沖合で採餌ダイビングをしたり、石狩川河口付近で休息をしたりするが、あまり長居することはない。同じ旅鳥であるユリカモメに比べ総個体数はかなり少ないとみられる。また比較的短時間のうちに通過してしまうので、観察機会はそれほど多くはない。

他のカモメ類について、ワシカモメは厚田漁港では冬期間中、少数ながらもほぼ定常的にいることが確認されているが、石狩浜および石狩湾新港での記録は極めて少ない。そもそも、カモメ類中でワシカモメはそれほど多くはないので、カモメ類の絶対数が多い厚田漁港あたりでは目撃されても、当該地域ではそれほど目撃されない可能性は否定できない。ミツユビカモメは主な生息域が外海であるため、沿岸に近づいて目撃される機会はそれほど多くはないのであろう。コアジサシは北海道には秋や台風の後あたりに飛来する程度であり、石狩海浜地域を基本的な生息・飛来地の全部または一部とするカモメ類にはむしろ含めない方がいいのかもしれない。

4 野鳥からみた石狩海浜地域の自然

ある地域の自然の現状を鳥類相の観点で評価する方法の一つとして、過去の状況との比較がある。しかしながら、過去の記録については、石狩川河口付近、その殆どが川側での観察記録が残されているだけであり（たとえば、日本鳥類保護連盟、1973）、今回対象とした区域の記録は皆無に近い。

1981年にまとめられた「北海道における鳥類の地域別生息状況」（北海道生活環境部自然保護課、1981）の石狩支庁の鳥リストには、アビ類全種、ウミスズメ類全種、クロガモ、ピロードキンクロが未記録になっている。また、シギ・チドリ類の記録の殆どは石狩川側でのものとみなされ、石狩浜の状況は不明である。当時、石狩湾新港は建設初期にあたり、アビ類やウミスズメ類などがまだ飛来・生息する状態ではなかったのかもしれない

が、そもそも海岸線に沿って野鳥を観察する人がいなかったか、いたとしても観察記録を発表するようなことはなかったものと考えられる。

過去の状況を比較対照の基準とすることが困難であれば、ともかくも現状を少しでもまとめておいて、将来における「過去の記録」として残しておくかなければならない。

筆者らは1990年代半ばから十数年ほど継続的に観察しているが、野鳥からみた石狩海浜地域は、現在のところ、いわばごく普通の海岸線環境であるといえるだろう。この地域ならではの特別な鳥が生息・飛来するわけでもなく、また、特定の鳥種に、たとえば著しい個体数減少のような危惧すべき変化が起こっているわけでもない。年毎に記録される種、個々の鳥種の個体数の多寡などに変動はあるものの、その変動が何か特別の要因によるものではなく、自然的な変動の範囲内であろうという感覚がある。

人間の目から見たならば、先述したような砂浜の後退、またレジャー活動等による海浜砂浜および草原の破壊と汚染など、将来的危惧が拡大する要素は少なからず存在する。現在のところ、たとえばゴミが散乱する砂浜でもシギ・チドリたちは採餌・休息し、特にその場を避けている様子はない。しかしながら、鳥たちのその寛容さがどれだけのものであるかは保証の限りではない。海側砂丘草原の植生の回復は当然のことながら、それ以外の区域についても現状維持を最低限の設定値として環境を保全し、遠い将来においても、いつもの鳥たちが、いつもの時期、いつもの場所で見られることを願っている。

引用文献

- 北海道生活環境部自然保護課（1981）北海道における鳥類の地域別生息状況。「北海道自然保護計画」策定資料 No.7, 103 pp.
- 北海道野鳥愛護会（2001）私たちの探鳥会：探鳥会30年の記録。北海道野鳥愛護会, 176 pp.
- 日本鳥類保護連盟（1973）石狩川河口。干潟鳥類保護対策調査報告, 13-15.
- 日本鳥類目録編集委員会（2000）日本鳥類目録改訂第6版。日本鳥学会, 345 pp.
- 高野伸二（1981）日本産鳥類図鑑。東海大学出版会, 481 pp.
- 武田忠義（2005）マリン・オーサカ号事故による野鳥被害。北海道野鳥だより, 139, 8-9.

樋口 孝城（ひぐち たかしろう）

1945年帯広生まれ。北海道大学大学院理学研究科博士課程修了、理学博士。北海道医療大学教授（2011年3月定年退職）。石狩鳥類研究会代表。北海道野鳥愛護会広報幹事代表。